

---

# 冬の向日葵

桜桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冬の向日葵

### 【ZINE】

Z0689Y

### 【作者名】

桜桃

### 【あらすじ】

「わかつてほしいのは貴方だけ。  
隣に居てほしいのも貴方だけ。」  
願い事は1つ。  
彼の隣に居たい。

「なあ、灰原。」

「何よ。」

「え、いや・・・起きるのか?」

朝、学校に来たコナンは隣の窓に話しかける。

「別に。どうして?」

「いや、今ひどい顔見えてるからよ・・・」

「もともとこの顔なのよ。」

「眠くなったなら・・・」

「ぐもと荒こ口調で囁いた。

「べ、別にやうこわがじや・・・」

もつと怒りせたかと焦るコナン。

「私なんかにかまつてないで、彼女を元気付ける方法」を考えれば？

最近また、泣かせてるやつじゃない？」

「そ、そりだな・・・」

「電話をしてみるとか、いろいろあるでしょ。」

乱暴に教科書を置いていく。

「哀ちゃん、どうしたの？」

「あ・・・別に、なんでもないわよ。」

「すっげー変わつよ。・・・」

「何か言つたかしら？」

「何も言つてしません。」

「そう。」

「コナン君と哀ちゃん、何はなしてたの？」

「他愛のない話ですよ。」

「ふうん。」

歩美は人差し指を頬にあてて、?マークを浮かべた。

やあつと書ける日がきました！

mineさんのからのリクエスト小説です。

蘭と哀の恋のバトル！！

どうなるのじゃつか？

これからも宜しくお願ひします

「　「　「お・ん・せん!お・ん・せん!」」

歩美、元太、光彦の3人は嬉しそうにはしゃいでいた。

ここは阿笠邸の前。

「それにしても・・・博士と灰原さん、遅いですね・・・。」

「ちょっと待つててって、15分前に言つたきつだよね。」

「腹でも壊してんじゃねーの?」

「・・・元太君じゃないんですから・・・。」

「ま、取り合えず寒いから博士ん家で待つてよーぜ。」

「賛成!ー!」

\*\*\*\*\*

「はーかせーまだあ?」

「まちくだびれてしまつましたよ。」

「俺なんか腹減つちまつたぜー」

「なこにせんじやんだよ。」

「すまんすまん。昨日のつけに準備してなくてな・・・」

「だから言つたじやない。  
もう準備したの?つて。つたく・・・。」

「ははは・・・。」

もつ吐笑こするしかない。

「仕方ねえ。俺達も手伝うぜ。」

「そうですね！」

「皿でせつたらすぐ終わるやん。」

「アーネスト・ヘミングウェイ」

卷之三

何に対してもハイテンションな3人に

小さく笑う。

「そういえば・・・彼女に電話してあげたの?」

「え？ あ、ああ・・・まあな。」

ズキンツ

「あ、う・・・・・」

「・・・・? 何か、怒つてねえか?」

「氣のせこよ。」

「?」

「せひ、せひあとこれ運んでくれる? じやなこと口が暮れるわよ。」

やつまに放つと娘はスタスターと柴を出した。

「・・・なんだあ?」

コナンの頭の中は?マークでいっぱいだった。



哀は静かに窓の外を眺めた。

「さあね。」

「はあ？ それって、俺の「とかよ。」

「……どっかの誰かさんも、あんまりのうけないでよね。」

「わ、わかってる。・。・。・。」

「食べ過ぎるなよ、元太。」

「たっくさんのお土産買つてかなきやなー。」

「楽しみですー。」

「せりと出発だねー。」



文化の日・・・は

部活の打ち上げ会です

部活が終わってそのままドンキへ直行なのですが・・・。

声がない・・・！

明日は部活、見学だわ・・・。

「やあっといけるね 温泉。」

「ほんとですね。」

「つたく博士、準備にどんだけかかってんだよ。」

「まあ、今度からは灰原の言つとおり  
前の日から準備しとくんだな、博士。」

少年探偵団の言葉に博士は苦笑い。

「ふああ・・ほんとならもつと寝ときたいのに  
博士にたたき起しにされた私の身にもなつてほしいものね。」

「すまんのあ、哀君。」

「私、寝てるから着いたら起しして。」

助手席に座る哀が冷たく言い放つ。

「おい、博士。

灰原、いつもに増して機嫌悪くねえか？」

「わしが起こしてしまったからだるひつへ」

「いや、最近ずっとなんだよなー・・・」

「ちよつと、聞こえてるわよ。」

「え、。」

哀はジロリとコナンを睨んだ。

「私の機嫌が悪かろ? とそうでなかろ? と貴方には関係のないこと? でしょ?」

「あ、ああ・・・そうだな。」

ナンと博士は田を点にするしかなかつた。

キキツ

「わあ・・・温泉、だね！」

「ええ・・・温泉、ですね！」

「お・・・・温泉、だな！」

瞳を輝かせる。

「おい、灰原。着いたぞ。」

「ん・・そう。」

力チャツ

「綺麗な旅館ですね。」

「温泉にはいるの、楽しみ～～！」

「俺たちの部屋、どうだよーーー。」

「これこれ・・・」

「おい、走るなって。・・・女王様が怒るわ。」

後ろで腕を組み、睨む哀の姿を見て口ナシはつぶやいた。

「女王様って、私のことかしら。」

「他に誰がいるっていうんだよ。」

「じゃあ・・・女王様の荷物、持つてくれない?」

「俺が?」

「他に誰がいるっていうのよ。」

哀はコナンに荷物を差し出す。

「はあ・・・」

「落とさないでよね。」

「女王様の大切な荷物なんだから。」

「へいへい。」

「あれー」ナンくん、何で喪ちやんの荷物持つてるの?」

「お願いだからここに触れないでくれ。」

「?」

あつちーじゅぢに転々として元太と光彦は叫んだ。

「 いじゅうがお部屋で、いじやこます。」

「 いじのお部屋、ヒトイリギツヒツヒツんだ。」

「 あやに今の時期にぴったりね。」

「 いじのお部屋は柊の花がよく見えるんですよ。  
今は冬ですから。」

ヒツヒツと笑つて説明してくれた。

「 いじわらは紅葉だつてよー。」

「 いじわらは桜ですー。」

「そこのお部屋は秋になると紅葉が綺麗に見えるんです。  
そして、そこのお部屋は春になると桜が満開に咲くんですよ。」

「へえ・・・それ見える花の名前を部屋に割り振つてるわけね。」

「

「なんだか口マソティック。」

「・・・重い。」

「あなたね、感動しているそばからそんなこと言わないでくれる?  
崩れるわ。」

「あんなあ、おもてーんだよこれー。」

「あら、私女王様なんですよ?」

「女王様にそんな重たいものを持たせる気?」

「・・・お前、女王様って言つたの、気にしているのか?」

「別に。」

「ナンは田が点になり、哀は睨んでいる。」

「 あれ、どうも。」

中へと入っていった。

遅くなつてすみません！！

次回もまた、宜しくお願いします！！

「わあ、ひろーい！！」

「部屋がたくさんあります！」

「お、お、ち来いよ！風田場も应いせよ！」

わあ、早くお風呂入れよ、よ！  
入りたい！」

「……風呂上がりなくて……」

あそこか！」

——大浴場！」

3人はおおはしゃぎ。

「どうするへ博士。

先に風呂に入るか?」

「わしはどちらでもかまわんが・・・

「ねえ、先に入っちゃおうよ!」

「そうですね。」

「俺もう入る気満々だぜ!」

「んじゃあ、今から一時間後でここに来て夕飯にしてやるぜ。」

「行く、袁ちゃん。」

「悪いけど、私はバス。」

「おーおー・・・お前口元きしまで雰囲気ぶつ壊すなよな。」

「うるさいわね、疲れてるのよ。」

「お風呂なら私が好きなときに入るから。」

「吉田さん、ごめんなさいね。」

「あ・・・ううん。気にしないで。」

「じゃ、元太君、光彦君、行こう?」

「おおー!」

「はい。」

3人で仲良く歩くところを見送る。

「・・・灰原、オメー何怒つてんだよ。」

「別に。」

「うそつけ。顔が怒ってるのバレバレ。」

「私はもともとこういう顔なのよ。」

「大体、風呂くらい一緒に入ってやれよな・・・歩美ちゃん、完全に作り笑いしてたぞ。お前にだつてわかつてたんだろ?」

「・・・」

「何で怒つてんのかしらねえけど  
夕飯はちゃんとカルシウムとつておけよ?」

コナンは少しあつていー残すと部屋をあとこした。

「はあ・・・ったく、本当に女心をわかつてないのね。  
あれでちゃんと探偵が務まってるのが怖いわ。」

哀は桜の花を見つめながら少しあつぶやいた。

次回もよろしくです！！

「はー、気持ちよかつた  
あれー、哀ちゃん何読んでるの?」

「え? ああ・・・科学者の苦悶。つていつ  
ゾクゾクしひやつよくな話よ。」

「へえ。

「終わったら歩美にも見せて!」

「いいけど・・・死体とか殺しとか・・・  
あるし、漢字も沢山あるから読めないわよ?」

「やうなんだ・・・歩美には無理そうだね。」

やう言つて笑顔を向ける。

「吉田さん、一緒に入んなくて・・・怒つてる?」

「え? なんでー? そりや、ちょっと悲しかつたけど・・・でも、哀ちゃんが入りたくないって言つてるんだもん無理には誘えないでしょ?」

「吉田さん・・・」

「あ、ねえー哀ちゃん、柊の花が月の光で輝いてるー。宝石みたいー。綺麗だね!」

「ええ・・・」

「へえ、じー、柊だけじゃなく月も綺麗に見えるんだな。」

「わっ! ノナン君ー! ビックリした・・・」

「貴方ね・・・人間なら人間らしく物音くらに立てなさーよ。ビックリするじゃない・・・」

「わりーわりー。」

悪そうに詭びないノナンに哀はため息を漏らした。

「そろそろ夕飯の準備しに来るんじゃない？」

「え？ ここってバイキングとかじゃないの？」

「ああ・・・ここは旅館だからここの人気が持ってきてくれんだよ。指定の時間にな。」

「へえ。」

「はいはい・・・探偵さんは何でも知つていいわね？」

「あのなあ・・・嫌味にしか聞こえねえんだけど。」

「別に。」

「まあ・・・ちなみにこの引き戸をひいてみると・・・」

「わあ・・・！」

「綺麗な天女の絵が飾られてるんだぜ。」

「それさ、ジグソーパズルで、こここの女将さんの趣味らしいんだ。あまりにも作りすぎたらしくて一部屋一部屋に飾つてるんだぜ。確か・・・サクラの部屋は女神。スミレの部屋は天使。ヒマワリの部屋はつばさ。コスモスの部屋は妖精。つと・・・こんな具合に。」

「・・・かなり詳しいのね。」

「ああ・・・前にここで殺人事件があつて・・・」

「殺人事件つて・・・」

「大丈夫、現場はもう使われてないからよ!」

「そういう意味じゃないわよ・・・つたく。」

「それより、小嶋君たちは?」

「ああ・・・まだ入つてるぜ。  
遅いから先にあがつてきたんだ。」

「ふーん。」

ダダダダダダダッ

バンッ

「元太、少し静かに・・つて光彦かよ。」

「た、大変です！」

光彦の後ろから元太が息を切らしてやつてくる。

「た、大変だ！」

「どうしたの？」

「殺人事件か！？」

「・・・なんで嬉しそうなのよ。

人が殺されることがそんなに嬉しいの？」

「そうじゃなくて・・・

最近事件がご無沙汰だったから・・・  
謎解きしてーな、って思つてて・・・

「だつたら、なぞなぞでも解いてなさいよ。」

「あれは簡単やんなんだよー。」

「だつたら難しきのやればこ二ドショヘ。」

「ヤーじゃなくてー。」

「ビハでもここんでやん、そんなのーー。」

「とつあえず・・・僕にこいついへば」セーー。」

「「？」

とつあえず、光彦につこつこへー」となつた。

さて・・・

殺人事件、なのでしょうか？

それとも・・・。

「おい、光彦。

一体何があつたんだよ。」

「あの人、見てください！！」

指をさす方向を見る。

腰まであるだらつ長い黒髪はゆるくカールされている。

真っ白な肌にうつすらと頬はピンク。

薄い唇。

世間では一般的に「美人」の分類に入る

1人の女が周りにちやほやされながら笑っている。

「あの人はどうかしたか？」

「なんか、女将さんとか手懐けてるけど……  
どつかの令嬢なのがしら？」

「いえ、違いますよー！」

「じゃあ、誰なの？あの人。」

「新一さんの恋人らしいんですよ！」



「「はあーーっ。」

コナンと哀は同時に声を出す。

「ちょっと、工藤君。

貴方いつの間にあんな人に出会ったのよ。」

「しらねえよ。

第一、名前も知らないんだからよー。」

「だったら何で名乗ってるのよ。彼女だつて。」

「だーかーら、しらねえよー。」

大体、新一なんて珍しい名前じゃねえだろ。」

「あのー、『ナン君、灰原さん……  
僕の話し、聞いてますか?』

「あ、わり……」

「で……彼女は高校生探偵の『藤新一の彼女だつて  
言つてるの?』

「はい。何でも新一さんが『』で起きた殺人事件を解決したらしく  
て……

「この旅館の人結構新一さんに恩を感じてるそなんですよ。』

「だから、彼の恋人だというだけであんなにちやほやとされてるの  
ね。』

「はい。』

「でもさー、新一お兄さんの恋人つて蘭お姉さんでしょ?』

「二股なんじやねえか?』

「ひどいですね、それは。』

「男の風上にもおけません!女性の敵です!……』

「おいおい……』

「まあまあ……私の見たところ。  
彼女は偽者ね。』

「彼女は偽者ね。』

「え？ 偽者？」

田を丸くする歩美。

「ええ。

でしょ？『江戸川君』？」

「・・・。ああ、新一兄ちゃんは『股するよ』ひな男じやないよ。  
それに・・・」

「それに？」

「う、蘭姉ちゃんの」と以外はが、眼中にないと・・・  
思ひ・・・」

ズキンッ

真っ赤になりながら答えたコナンの姿と

言葉に赤はとまどいを隠せないでいた。

「そつかー、そだよねえ。」

「じゃあ、何の人・・・そんなうそついてるんでしょう・・・」

「金でも貰うつていう魂胆じゃねえか?」

「そりでしょつか・・・」

「ま、嘘なんてすぐバレるものよ。」

「本人がそれで気がすむのならいいじゃない。」

「ほつときなさいよ。」

「だけど・・・」

「ま、ここは灰原の言つとおりほつとけ。」

「そのうち本人も飽きるだろ。」

納得できない様子の3人を置いて再び歩き出す2人。

「そりいえば、博士びついた?」

「ああ、博士ならまだ入つてますよ。」

「はあ？ いい加減のぼせるぞ？」

「つていうか、夕飯に間に合わないわよ。」

「だ、だよな・・・」

「僕、呼んで来ます。先に戻つてください。」

「あー、じゃあ、よろしくな、光彦。」

「はい。」

まさかの偽者？

いやあ、これ・・・  
ある少女漫画にあつたんですね。  
偽者を偽つた美しい女性が居て・・・  
でも本物はただの子供みたいな対して美しくもない女の子。  
その子は自分が本物だって言つんですけど信じてもらえないんですね。

そこで考えたのが・・・

『新一の彼女だって嘘つくなつがいたら・・・？』

でした。

これにどう対処するのかも自分としては楽しみで  
書きたかったんですね。  
3年越しの夢でした・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0689y/>

---

冬の向日葵

2011年11月17日21時10分発行